

会 議 録（確定稿）

会議名称	第三次西東京市地域福祉活動計画（第7回）策定委員会
日 時	平成25年7月30日（火）午後7時～9時10分
会 場	田無総合福祉センター2階視聴覚室
出席者	<p>（策定委員） 熊田委員・尾崎委員・畠山委員・田中委員・土方委員・陸名委員・高橋委員・白倉委員・鵜沢委員・岩崎委員・小松委員・三輪委員・内田委員・田谷委員・成田委員・伊佐委員</p> <p>（事務局） 栗山・齊藤・丸木・鈴木・鵜野・妻屋・長谷川・関根・利光・八阪・廣瀬</p> <p>（コンサルタント） 田口・渡邊</p>
欠席者	高梨委員
会議次第	<p><次第></p> <ol style="list-style-type: none"> 1. 委員長挨拶 2. 資料確認 <p><議題></p> <ol style="list-style-type: none"> 1. 前回会議録確認 2. 西東京市の現状と地域課題の確認「地域の問題点・解決のアイデアの検討」（グループワーク）2回目 3. ニーズ把握の内容と実施時期について 4. その他 前回の宿題について（東大阪市地域福祉活動計画）
配付資料	<p><事前配付資料></p> <ol style="list-style-type: none"> 1. 第6回策定委員会会議録（未定稿） 2. 計画検討の流れ 3. 第6回策定委員会グループワーク原文 4. 第7回策定委員会グループワーク進行資料 5. ニーズ把握について 6. 西東京市各種調査結果の概要 7. 東大阪市社協の地域福祉活動計画 <p>ご案内：懇親会（8月30日（金））のお知らせ</p> <p><当日配付資料></p> <ol style="list-style-type: none"> 1. グループワークメンバー表 2. 第6回策定委員会会議録（未定稿）4P差し替え
結 論	<p>◆決定事項</p> <ol style="list-style-type: none"> 1. 前回会議録は、修正の上、確定稿とする。 2. 【ニーズ把握について】第三次西東京市地域福祉活動計画策定にあたり、原則として、既存のデータ等を活用することとする。アンケート調査については、計画の内容に実施項目として盛り込んでいく。

<次第>

1. 委員長挨拶

2. 資料確認

事務局より、当日の資料確認が行われた。

<議題>

1. 前回会議録確認

事務局より、前回会議録の確認が行われた。委員から修正箇所があり、当日差替え分を配付し、説明した。その後、承認された。

2. 西東京市の現状と地域課題の確認「地域の問題点・解決のアイデアの検討」
(グループワーク) 2回目

事務局より、グループワーク実施にあたり説明を行った。

1) 地域の問題点・解決のアイデアの検討について (各班の検討結果)

A 班：「お互い様」の気持ちを大事にするべきだと思う。「お互い様」ということは、気負わないこと。また、楽な気持ちで、隣近所同士で助け合っていくことが重要である。重点キーワードにもかかることだが、「楽しい企画」を通して「つながり」を持つことが必要である。「楽しい企画」には、お祭り・趣味・得意なこと・特技が考えられる。これらを生かして地域で活動をする。子どもたちもこのような活動に参加し、また、子どもたちを通じて世代間の交流を行う。この点について、「自分も楽しむ」ことが重要であり、また「楽しいこと」でつながっていくことが望ましい。「楽しいこと」を通して、本人も周囲もうれしかつたり喜んだりする。自分の趣味や特技を通して地域の人材を発掘し、最終的にはつながっていけると考えられる。「楽しいこと」の企画については、難しさもある一方で、お祭りや趣味としてマージャン等を切り口とするアイデアも出た。これらを通じてつながっていけたら良いのではないか。

B 班：前回の話し合いでも話題となった「孤育て」・「孤立」という考えから、議論が出発した。子育て分野だけでなく、高齢者や障がい者も含め、ドア（自宅）の向こうにいるのに、こちら側（地域）には来ないという状況にある。すべての人が地域に出て行けるためには、訪問という方法を用いて、つながりを持たなくてはいけないという意見がグループ内で出た。ただし、単に訪ねるだけでは不十分だと考える。(いい意味で) おせっかいな人 (=人柄やスキルのある人) が訪問をする必要がある。また、訪問する場合も、きっかけがないと難しい。そこで、「みんなで楽しめるイベント」や、マンションでいえば「(子どもの着なくなった服を交換し合う) お下がり交換会」、クーポン付きの「回覧板」、ゴミステーションでの交流の機会など、きっかけをつくる方法を工夫すること。また、活動の中心となる人も重要である。つまり、「人」と「機会」の2点が重点キーワードとなる。これに加え、重要な点は、障がい者・児に対する教育について、学校に限定せず地域の中で教育

を行うということ。会場という意味での「場所」だけでなく、「空気」、「機会」という意味も含み、楽しみながら教育をする必要がある。お祭り等に関しては、その関わり方が問題となる。単に参加するだけでなく、主催側も含め「やりがい」を感じる機会として活用する必要がある。

- C 班：前回、問題点として挙げた「つながらない」、「人と人との関係が希薄」ということについての課題としては、「問題」が浮かび上がってこないことである。それは、地域の問題、個人が抱える問題、高齢者、母親、児童、障がい者の問題すべてに当てはまることである。自治会活動について言えば、一例として役員が比較的若い自治会において、ひとり暮らしの高齢者に対してどのような考えを持っているか、役員に問いかけた際、「接点がないため福祉については分かりかねる」という返答があった。自治会としての方針やスタイルは、従来のものを繰り返している面もあるように思える。新しく発生している問題については、本来は、自治会、民生委員が把握しているはずだが、福祉関連の問題、制度やサービス等について認知されていない、活かされていない実態がある。自治会のない地域となると、問題を浮かび上がらせることがさらに困難に思われる。民生委員については、活動の度合いに差があるという指摘があった。地域包括支援センター、地域福祉コーディネーターについては、このような機関に十分、問題が上がってきていないように感じる。それらの機関が連携して、問題が明らかになるようにコーディネートする必要がある。「つながり」づくりの担い手として求められるのは、良い意味での「おせっかい」な人だと思う。節度ある介入をする人を育てていく必要がある。2つの重要な理念として「一人の問題をみんなの問題としてとらえる」、「一人ひとりが主役になれる場をつくる」ことが挙げた。お客様としてではなく、一人ひとりが行動することを通して社会的な弱者を減らせる地域づくりにつながるのではないかという話し合いを行った。

2) 全体での討議

事務局よりA班の重点キーワードとして「楽しい企画」、「一人ひとりが楽しめる企画」、「次につながる企画」と「つながり」、「人材発掘」を挙げ、要点をまとめた。B班について、「孤育て」に対して「おせっかいな人」、「楽しめるイベント」を重点キーワードとして挙げた。C班については「おせっかいな人」が「つながり」のきっかけになるということについて挙げ、「一人の問題をみんなの問題としてとらえる」、「一人ひとりが主役になれる場をつくる」という2つの文言を「重要な理念」として読み上げた。

- A 班：A班で重要な点は「お互い様の気持ちを大事にすること」である。支援する側、支援される側の役割が偏っているのではなく、将来的なことを考えるとずうずうしく頼めるようになることが理想的な姿であると考える。歳をとったときにいずれ近所にお世話になるという気持ちがベースにあり、お祭りやつながりはそのきっかけや方法論にすぎない。
- C 班：A班と同様に、C班においても「場をつくる」ことよりも、「一人ひとりが主役になる」ことが重点キーワードである。あくまで「一人ひとりが主役になれる場」が必要である。

- B 班：B 班について、「つながり」をつくるために「中心になる人」と「機会やきっかけ」が必要となることがキーワードとなる。また、先述のキーワードだけではひろえない障がい児・者に関して、「教育」が不可欠だということを述べたかった。
- C 班：「一人の問題をみんなの問題としてとらえる」ことが、C 班においては重点キーワードである。
- C 班：「おせっかい」という言葉が気になる。「おせっかい」には、余計なことをする人というイメージがある。他の表現がないかと考えている。
- B 班：「人」と「つながりをつくる機会」には、ただ単に楽しいだけではなく、子どもたちが役割を担う、働き手になることを通して「やりがい」を感じるような「機会」という意味が含まれる。
- A 班：一人ひとりがつながることは難しいと思う。誰かとつながっていればよいと考える。誰ともつながっていない状態が危険であり、一方で誰かとつながっていれば、情報が入ってくる上、問題への対応の仕方も分かり、手助けができると思う。ただ現状として、部屋に閉じこもっている人、外に出ない人、拒絶する人が増えており、その状況の方が問題に思える。かといって、地域の人全員とつながる必要はない。

事務局より、次回以降の委員会で、これらのキーワードを踏まえて基本目標や具体的な取り組みを検討する旨を説明した。

委員長：発表全体を見ると、「楽しい」という言葉が頻繁に使われているように思える。また、別の表現であっても全班に共通する意味合いの概念が見受けられた。「おせっかい」がこれにあたる。地域の中での取り組みにおいて（良い意味で）「おせっかい」な人が重要なのではないかと各班から出ているように思える。この他に、「お互い様の気持ちを大切に」は、「一人の問題をみんなの問題としてとらえる」に類似した概念としてとらえることができると思う。また「機会、場づくり」は、「一人ひとりが主役になれる場」と意味がつながると感じた。このように整理し横断的にとらえると、今後取り組んでいくべきことの柱が見えてくるように感じた。「お互いの気持ちを大切に」「つながり」等、地域福祉の取り組みの中での王道の言葉を大切にしつつ、独自性、既存にないものをどのように生み出していくのかということも議論していく必要がある。次回は、計画の柱を引き続き議論し、皆が納得できるような形にしていきたい。

3. ニーズ把握の内容と実施時期について

1) アンケートおよびヒアリング調査について

事務局から、事前配付資料 5「ニーズ把握について」を用いてニーズ把握について説明を行い、委員に意見を求めた。

委員長：西東京市地域福祉計画で市民アンケートが既存データとしてある。このようなデータを活用する上で、検討する過程において分からないことが出てくる可能性もある。例えば「おせっかいな人の研究をしたい」など

調査の必要性が出てくるかもしれない。既存のデータに載っていることを写すのではなく、疑問に思うこと、分からないことを調べることが望ましい。そこで、調査の手法としてアンケートやヒアリングを行うことが考えられる。その段取りの詳細は後で議論するが、まずはアンケートを行うべきかどうか、考えをお諮りしたい。こういうことが分からないから、調べていこうというご意見をいただけるとありがたい。

委員：西東京市での他部署のアンケートは使用できるのか。例えば、高齢者生活については65歳以上の詳細データが分かっていると記憶している。

委員：高齢者支援課がとりまとめ、公表しているものがある。それを活用することについては差し支えないはずである。

委員：既存のアンケートを読み込んだ上で、ヒアリングの必要があれば実施したい。ヒアリングについては事務局で特定のイメージや取り決めはあるのか。

委員長：特に決まっていない。今後の策定スケジュールとの関連で、アンケート調査を実施するか否かを、まずは決めさせていただきたい。

委員：地域福祉活動計画において、市民の意見を丁寧に把握する必要がある。時間の余裕がないので市のデータに依拠することについては理解できる一方で、地域福祉活動計画を策定する際に、丁寧に市民の声を聞く機会は設けるべきだと考える。委員が市民の声を代弁しているとはいえ、それだけでは難点があるように思える。

委員：さまざまな西東京市の調査結果はどれも代わり映えがしないように感じられるので、既存のデータについてはさらにアンケート調査を行う必要がないと思う。むしろ、データを丁寧に読み込む必要がある。必要性が出てきたらヒアリングやアンケート調査を取り入れればよいのではないか。

委員：本日のグループワークで重点キーワードを出した。キーワードについて深めるために、アンケート、ヒアリングは可能性として考えられる。(委員長が例に出した)「おせっかいな人の研究」など独自に深めることも選択肢としてあるのではないか。

委員：アンケートについては、「来年度アンケートを行う」旨を計画本文に入れるということではどうか。第三次西東京市地域福祉活動計画(以下「第三次」)に続く計画においても、十分な検討の時間がないということを繰り返す恐れがあるので、目標を持ってアンケートを実施することを計画に盛り込む必要があるのではないか。アンケートの対象、例えば集合住宅に住んでいるつながりのない人達に対して、その人達と接する機会をつくる、という目的も含めたアンケートはどうかと考える。基礎資料の中で、集合住宅に多く住んでいる若い世代は、つながりが少ないが、つながりたいとも思っているという調査結果がみられる。つながりたいと思っている人達へのアプローチの手段として、アンケートを実施するという計画することも考えられる。

委員：高齢者、障がい者など多数のアンケートがある中で、その対象者にとって、一つひとつのアンケートに答えることが負担となっている。その上、市民としては、すべてのアンケートを市が出しているものとしてとらえている。そのため、まずは重複しない形を考えることが重要だ。また、実施する場合は、インターネットを活用するなど回答者の幅を考える工夫が必要だ。第三次に向けてアンケートを計画することについては良いアイデアだと思う。時間をかけて、「本当に必要だからアンケートを行う」という姿勢が求められていると思う。

委員：市の地域福祉計画のヒアリングの中で、事業主の対象として面談調査を受けさせて頂き、とても有意義な時間を過ごすことができた。アンケートの項目以外の内容について、「対話の中で言葉に出して表現ができた」と実感した。ヒアリング調査を実施する場合、活動計画をつくるにあたり、調査すべき内容を委員同士で時間をかけて共有し、しっかりと設計をした上で調査に臨むことが有意義だと思う。

委員長：これまでの議論をふまえると、既存データの活用をする意見が有力になっているように思える。計画の中にヒアリングやアンケートの実施について載せるというアイデアも出た。他に意見があれば出して頂きたい。

(委員から意見無し)

委員長：それでは、今回の計画では既存のデータを最大限に活用する、ということを中心とする。さまざまな調査を読み込むことは、大変な作業となるが、その中で必要な情報を、この委員会の中で共有しながら読み込む必要がある。万が一の時はその時考えるが、原則としては、アンケート調査・ヒアリング調査は、今回の計画を作る過程の中では行わないこととしたい。調査の取扱いについては、改めて計画の中に位置づけるかどうかを含めて、委員の皆さまからご意見をいただくことを基本としたい。5年間の計画の中に組み込むという意見については、浸透具合を見ることが含めると、アセスメントのような形態をとることも考えられる。あるいは、アクションリサーチ的な形態での調査も考えられる。そういうことを今後、検討していくという理解で間違いはないでしょうか。

(委員から異論無し)

2) 住民懇談会について

事務局より資料5を用いて住民懇談会の提案を行った。

委員長：懇談会を行うことで、計画に意見を反映し、計画に盛り込むことができるので、パブリックコメントに代わる形のものとして適当な手法だと思う。市民に計画の骨子について、計画策定途中でたたいてもらう（意見をもらう）というこの提案については、次回以降決定するが、委員からの意見をお聞きしたい。

委員：この計画の途中段階で骨子を公表して、それに対して質問・意見を述べられるような住民は少ないのではないかと。委員会自体がパブリックコメントとして十分に機能しているように思える。懇談会を通して何か得ら

れるようなものがあれば実施してもいいと思うが、どのように考えるか。

事務局：住民懇談会で声をかける対象は、ふれあいのまちづくり事業の関係者、ほっとネット推進員、地域包括センターの関係のささえあいのネットワーク登録者、民生委員・児童委員のほかに、社協だよりの募集によって参加する一般市民も含まれる。

委員：福祉に関する活動に関わっている人に対して声をかけるということか。第二次では懇談会を実施したのか。

事務局：実施していない。

委員：これまでの話をふまえると、社協側の意見をその場でもらうよりも、この場にも活動に携わる立場の人がいるので、そのような日々、活動されている方たちの声を今後5カ年の中で随時、拾っていき、5年後に計画を策定する時には十分に議論できるように準備していくことの方が、より大事だと思える。1日限りのパブリックコメントを設置するのでは、もったいないように感じる。

事務局：計画策定に携わっていない一般市民も対象にしたほうが良いと思う。早い段階で市民を巻き込んでいくことは、来年度以降、計画を動かしていく上で、今後の活動の主体となる人材になり得ることにもつながるのではないかということも考慮して、住民懇談会の開催を検討したい。

委員長：第三次は、市民が読んで理解できる計画でないといけない。そのため、できれば計画策定の過程で意見を出してほしいので、案として懇談会の開催を提案した。本日は最終決定ではないので、次回引き続き議論をしたい。

4. その他

1) 東大阪市社協の地域福祉活動計画」について

事務局より、事前配布資料7「東大阪市社協の地域福祉活動計画」についての説明を行った。

2) 懇親会について

事務局と副委員長より、委員会の懇親会について案内がされた。

以上